



公明市議と患者の出会いがきっかけ

一般に認知されていない**脳脊髄液減少症**(別掲)への理解を広げるため、茨城県取手市はこのほど、全25の市立小・中学校に同症の啓発冊子を配布した。県内では初の取り組み。実現の背景には、市議会公明党の阿部洋子議員と同症患者Aさんとの出会いがあった。

知ってほしい

脳脊髄液減少症

「小・中学校でこの冊子が配られたのは、脳脊髄液減少症の理解を広げる大きな一歩」。同症患者で茨城県在住のAさん(70歳代男性)は、感慨深げに語る。

同冊子は、脳脊髄液減少症患者支援の会「子ども支援チーム」(鈴木裕子代表)が発行したもの。サイズはA5判

30分で、症状の解説や発症事例、学校や家庭での対応などをQ&A形式やイラスト入りで分かりやすく説明している。

茨城・取手市

公明党の推進で10月、厚生労働省の研究班が初めて同症の診断基準を発表したことに続いての朗報に、Aさんは自身の闘病の歴史を思い返し、目を細めた。

教育現場に啓発冊子

県内初 全市立小・中学校へ配布

Q&Aと、症状や対策など説明

Aさんが突如として急激なめまいと倦怠感に襲われたのは2005年5月。横になると気分が安らいだが、慢性的な頭痛は治まらず、外出もままならなくなりました。すぐに治ると楽観していたものの一向に症状は回復せず、病院で診察を受けても病名がはつきりしない。原因が

脳脊髄液減少症だと判明したのは約2年後のことだった。「もともと早く分かっていたら……」。そんな気持ちを抱くとともに、「原因を知らずに苦しんでいる人々が他にもいるはず」という思いがよぎった。阿部議員と出会ったのはそうした時だった。自宅に訪問対話に来た阿部議員にAさんは、同症が一般に知られておらず子どもが発症した場合、不登校の原因になるケースもあることを訴えた。

これを受けた阿部議員は、教育現場での啓発の必要性を痛感。10年6月の市定例会で「子ども支援チーム」が作製した冊子を購入し市立小・中学校に配るよう提案していた。

「同症の存在を知らないま

脳脊髄液減少症

交通事故やスポーツなどで頭部や全身を強打することで脳脊髄液が漏れ、頭痛や倦怠感などの症状を引き起こす疾

全市立小・中学校に配布された啓発冊子



まだ、子どもの一生に関わる可能性もある。公明党にはまだ見ぬ患者の救済に力を注いでほしい」と力説するAさん。

阿部議員は、「講演会の開催などを通して、一層の理解促進に努めたい」と決意を述べていた。